

## カイダレと持送り — 独特の民家 —

東草野では、妻入りでトタンが被せられている茅葺きの民家が多く、甲津原では22棟を数え、集落景観を特徴づけます。さらに、甲津原、甲賀、吉槻では、入り口を南に設ける家屋が多く、降雪時に入り口を確保するための知恵だと考えられます。

カイダレは民家の入口に半間から一間の横木を出し、その先に水平に桁を乗せて、長い庇にしたもので、積雪時に入り口を確保するための空間です。収穫期には天日干しにした農作物を急な降雨から退避させるための空間でもあります。積雪の多い最奥の甲津原に最も多く、曲谷や吉槻でも見られます。隣接する岐阜県春日村(現揖斐川町)から大工を呼んできて建てられたと伝えられており、峠を越えた交流があったことを裏付けます。冬場になると雪囲いを庇にむけて立てかけ、冬季の作業場、薪や割木置き場などの空間になります。

持送りは、軒下において戸口前などの大庇を受けるためのもので、東草野に見られるのは民家の軒下

や、蔵の底につくもので、様々な意匠の持送りが見られます。民家によっては一棟に数枚の持送りが付くものもあります。滋賀県の平野部にはわずかしが見られず、東草野の四集落に持送りが多いのは雪が多いためと考えられます。その意匠には植物文様、自然現象文様(雲や波)、無文様などがあり、透かしがあるものもあります。比較的多い唐草模様は、生命力が強く途切れることなく蔓を伸ばしていくことから「繁栄・長寿」などの意味があり、縁起の良い文様といわれています。



▲草野家住宅のカイダレと持送り

## 情報BOX

◆米原市教育委員会では、埋蔵文化財活用事業として下記のパンフレット、マップ、リーフレットを作成しました。

### パンフレット

『伊吹山と円空』(A4版、カラー、12頁)

『伊吹山と播隆』(A4版、カラー、12頁)

※江戸時代の修行僧円空と播隆。それぞれの生き方に影響を与えた伊吹山の近世修験を考察。

『伊吹山 一荒ぶる神の坐す山の歴史』(A4版、カラー、28頁)

※あるようでなかった、伊吹山の歴史を紹介したパンフ。

### マップ

『米原市の遺跡ルートマップ3 一伊吹山山岳信仰編一』

### リーフレット

『米原市遺跡リーフレット48~55』

※石臼生産遺跡1~3、吉槻の石造物、伊吹山頂遺跡、伊吹山中の行場、伊吹山と山麓の石造物、出雲井

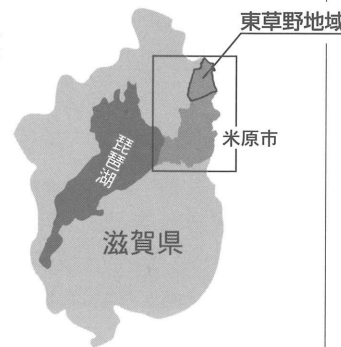
◆東草野地域の重要文化的景観選定に伴いパンフレットを刊行しました。

『東草野の山村景観 一琵琶湖を育む水源の景観一』(A4版、カラー、24頁)

◆米原市柏原宿歴史館では下記のパンフレットを作成しました。

『成菩提院物語』

(A4版、カラー、16頁、500円)



## ◆◆ 編集後記 ◆◆

米原市「東草野の山村景観」が国の重要文化的景観に選定されました■選定の基準となったのは、四通八達する峠道を利用した流通往来■集落内を滔々と水が流れ、豊富な湧水を活かした水の利用■西日本屈指の豪雪地で、雪と共生した居住形態です■同級生の選定は、岐阜の城下町・天橋立・生野銀山・奥出雲のたたら製鉄集落です■「東草野の山村」でどこなん？って方。数年後には東草野といえば、あの日本を代表する山村やっていわれるようになります(シャンギリっ子)

## 米原市文化財ニュース

## 佐加太 第39号

発行 平成26年3月21日  
編集 米原市教育委員会  
〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1  
米原市教育委員会歴史文化財保護課  
TEL.0749(55)4552  
印刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

## 近江と美濃を結ぶ峠の交流

平成26年3月18日、国内39件目の重要文化的景観に選定が決まった「東草野の山村景観」。豪雪地の山村集落における、流通往来・水の利用・居住空間のあり方が、選定基準となりました。今回は、東草野の山村景観の魅力のごく一部を紹介します。

姉川上流の東草野地域と美濃国(岐阜県)の村々はいくつかの峠道で結ばれていました。甲津原からは、諸家・広瀬・坂本(揖斐川町/旧坂内村)を結ぶ新穂峠。同じく甲津原と日坂(揖斐川町/旧久瀬村)を結び、現在は奥伊吹スキー場を貫通する品又峠。さらに、甲津原と諸家を結ぶ鳥越峠の三本の峠道がありました。吉槻からは春日美東(揖斐川町/旧春日村)を結ぶ国見峠が、美濃へ抜ける主要な峠道でした。

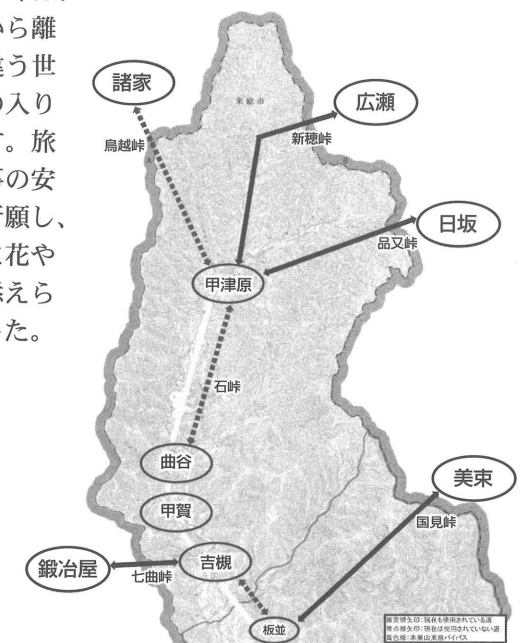
峠道は、仔牛を近江や関西から美濃へ移入した道であり、美濃の繭を吉槻で中継し、長浜へ運ぶ道であり、姉川沿いで収穫されたコウゾを美濃で和紙にし、再び鳥居本などへ納めた紙の道でもありました。浄土真宗の「廻り仏」もこの峠を行き来しました。甲津原には室町時代の能面(市指定文化財)が伝わっており、芸能や文芸もこの道があることで江濃一体でした。山中には炭窯跡がいくつもみられ、江戸時代初期から炭を焼き続けてきた山で、製品は長浜や彦根に出されました。職人や行商の行き来はたえず、曲谷の出稼ぎ石工が美濃に入るのも品又越でした。

甲津原集落のはじまりとして、平家や南朝の落人伝説が語られます。その根拠のひとつに甲津原には墓がないことがあげられます。源氏に敗れてこの地に逃れた平氏が、自らの存在を石に刻むのを拒否したからだということです。しかし、三本もの峠道が交差し、活発な交流があった甲津原では、落人も隠れ住みにくかったのではないのでしょうか。

東草野の峠道のなかでも七曲峠は最も重要な道で、ふもとの吉槻は交通の結節点としての役割を果たしてきました。縄文時代中期、約4,000年前の起し又

遺跡(曲谷)の土器や石器は、美濃や下草野の醍醐遺跡(長浜市醍醐町)と共通した様相がみてとれ、七曲峠を介した交流が先史時代にも活発におこなわれていたことがわかります。また古代以降、近代にいたるまで、東草野は姉川下流部の坂田郡ではなく、七曲峠を介して結びつく東浅井郡として編成されていました。炭は七曲峠をおりた鍛冶屋(長浜市鍛冶屋町)に問屋があり、農産物などは長浜方面へ運ばれました。鍛冶屋側からの物資の流入も盛んで、水産物については行商人による販売がなされていました。このため吉槻には商店や公共施設がたくさんありました。いまでも東草野中学校、行政サービスセンター、診療所、郵便局などがあります。

七曲峠には、鍛冶屋の草野常吉さんが建立した「峠の地蔵」(常吉地蔵)があります。新穂峠や国見峠、吉槻と上板並を結ぶ小さな峠にも石仏が置かれています。峠は、ムラから離れ、違う世界への入り口です。旅や仕事の安全を祈願し、石仏に花や石が添えられました。



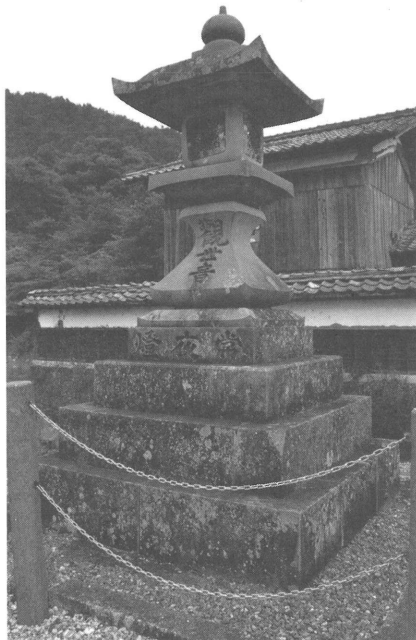
▲峠の交流の概要図

## 曲谷石工の活躍

### 米原市に残る作品

曲谷は石臼(粉挽き臼)作りの里として知られ、白博士として知られていた三輪茂雄の著書『臼』(法政大学出版)にも、大量生産地をもつ石臼のひとつとして「曲谷臼」が紹介されています。残念ながら現在は石臼作りがおこなわれていませんが、曲谷の集落のほぼ全戸で石臼作りがおこなわれていた名残りは、現在も集落内で見いだすことができます。それぞれの家の敷地内に、母屋とは別に小屋あるいは物置が設けられていて、これらが石材加工の場だったと考えられます。そして、各家の周辺では、石臼の一部や未製品などが、さまざまな用途に転用されて随所で見られます。石臼のほかにも花崗岩(曲谷石)で作られた石造品がたくさんあり、曲谷集落は、石臼に代表される石工の村を物語る文化遺産、景観を今日まで保持していることが、きわだった特徴です。

朝日の観音寺門前に一対の石灯籠(写真①)があります。「観世音」の各一文字にお米一升が入るといわれる大きな石灯籠の優品です。この灯籠には「文政七甲申年九月(1824)」「石工/當國曲谷村住人/木曾政五良大夫/大連義周/同増五郎太夫/義金」と刻まれています。曲谷石工の名前が判明します。春照の八幡神社には「文政八乙酉天/仲冬吉祥日」「石工/當國曲谷村/木曾政五郎/同増五郎」と刻む石灯籠があります。石工名はありませんが、伊吹神社(伊吹)の石灯籠も曲谷石工の作品とされています。これらの石材は、いずれも曲谷産花崗岩ではなく、青っぽい石材の「小泉石」「梨目石」と呼ばれるものです。同じ姉川沿いで産出し、曲谷の石工が複数の石材を扱っていたことがわかります。伊吹山登山口(上野)の金比羅灯籠も木曾義周・義金の制作で花崗岩



▲写真① 観音寺石灯籠

製です。

このように曲谷の石工が残した作品は曲谷以外の伊吹山麓の主要な石造物に残されていて、江戸時代における彼らの活発な活動をうかがうことができます。

市内で確認されている最も古い例は、太平神社(太平寺)の石灯籠で天明7年(1787)作、春照の秋葉神社の石の祠は寛政11年(1799)の制作です。これらには「木曾義致・致永」の名が刻まれています。

これらの作品から、木曾を名乗る義致一致永…義周一義金の石工の系統が読み取れます。さらに、曲谷石工が木曾姓を名乗っていることは、曲谷に石材加工を伝えた西仏房が木曾義仲の家臣であったことにちなむと考えられ、この伝承が江戸時代後期に遡ることを示すとともに、石工の自己認識がうかがえます。

### 岐阜県に残る作品

岐阜県揖斐川町の谷汲山華嚴寺本堂前の笠塔婆には「石工頭江州浅井郡曲谷村木曾(以下不明)」の銘があり、延享2年(1745)制作の曲谷石工の作品では最古のものです。このほか岐阜県には、関ヶ原町妙応寺の蓮石鉢(致永作/1799年/写真②)や大垣市上石津町の九里半街道常夜灯(義金作/1841年)など、美術的にも優れた作品があります。いずれも木曾姓の石工の作品で、米原で技を磨き、美濃に優品を残しているのです。さて、木曾姓石工とは別の系統と思われる作品が岐阜市乙津寺にあります。「石工佐吉/江州上浅井郡曲谷村/石工傳吉/同國同郡同村/石工松右工門」と刻まれた四国八十八カ所石仏で、江戸時代末期のもので、栗東市纒の大宝神社の鳥居も曲谷村の石工により製作された記録が残されています。曲谷は石臼の石材産地として傑出した存在であったばかりでなく、優秀な石工を輩出する土地でもあったことが明らかになります。



▲写真② 妙応寺蓮石鉢

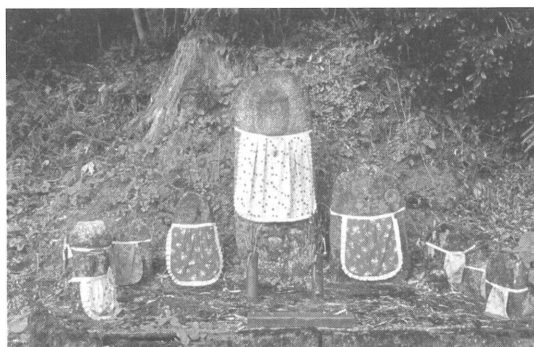
## 石造物の宝庫・吉槻

### 山間交通の要衝・吉槻

東草野は東西南北を結ぶ峠道が錯綜する交通の要衝です。なかでも七曲峠は最も重要な道で、ふもとの吉槻は交通の結節点としての役割を果たしてきました。吉槻の歴史景観を特徴づけるものとして石造物の多さがあります。交通との関わりでは、七曲峠の「峠の地蔵」、南の上板並集落から吉槻へ抜ける小さな峠道の石仏も峠の地蔵として、かつて吉槻の本校へ通った子どもたちから親しまれていました。交通の要所に安全祈願のために置かれたものです。

吉槻の石造物は、単独のものや集められたものが各所にあり、立地からは屋敷内で祀られているものと、道沿いに置かれたものに分けられます。後者は集積された事例も多く、砂防工事、道路工事などでの出土例が多く伝えられていて、もともとは地中にあったものが多かったと推測されます。

中世の塚を思わせる高まりを中心に石仏、一石五輪塔などが置かれていて、もともとの墓地の状況をとどめていると考えられるものもあります。五輪塔や一石五輪塔はもとより、小型の石仏は本来、墓標として作られたと考えられ、その像容も持物から地蔵とわかる例はなく、ほとんどが墓標に共通する阿弥陀仏とみられます。集落縁辺部の墓地で用いられていたものが、時間の経過とともに、移動され、次第に集落全体に拡



▲石仏



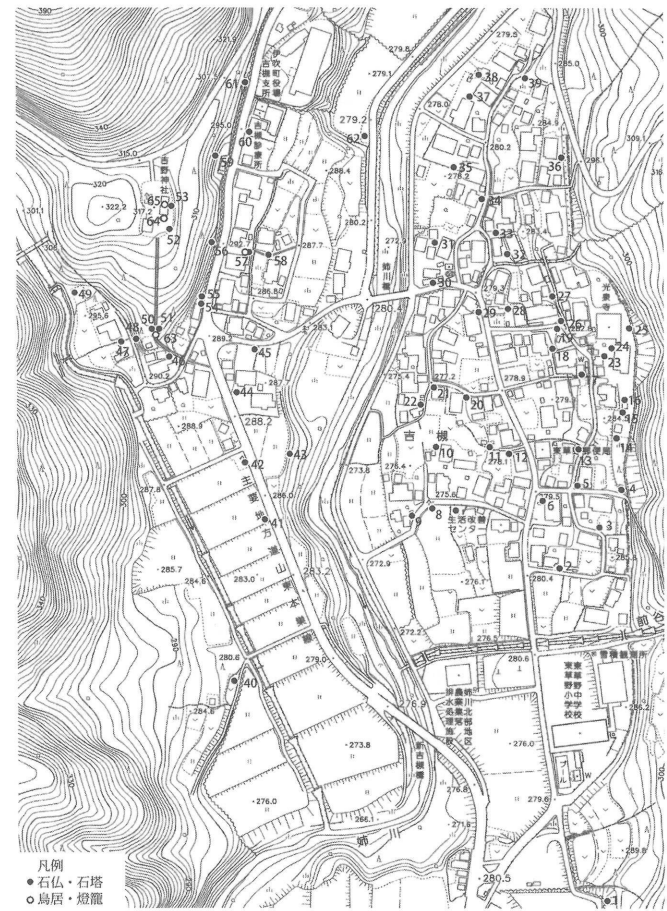
▲中世の塚状遺構

散したと判断されます。吉槻の石造物は、これらを墓標としていた人の多さを物語り、中世末から近世にかけて、この地域が交通の結節点として大いに賑わっていたことの表れです。

### 姉川の矢穴石

吉槻の石造物の素材は、花崗岩と砂岩、凝灰岩に大別することができます。製品との関係では、一石五輪塔や五輪塔を刻む墓石は砂岩、凝灰岩製のものが圧倒的に多く、これらは、中世からおこなわれ近世の比較的早い段階に消滅するので、吉槻の石造物の古い様相を示しています。したがって、この地域の石造物は砂岩、凝灰岩製のものから花崗岩製へと変化したと推測でき、曲谷石など姉川の花崗岩の利用が近世になって活性化される状況を裏付けています。

吉槻集落下流の姉川橋の河原には石を割るときに彫られた矢穴跡がある巨岩が点在しています。また県道沿いの斜面でも一点確認されました。吉野神社(吉槻)の参道石垣は、吉槻石と呼ばれる硬質の花崗岩で、すべて一つの岩から切り出したものだと伝えられています。石臼に適さない硬さの吉槻石は建材として利用されたことを示す資料です。吉槻の卓越した石仏の分布とあわせて、東草野地域全体で石材加工の伝統があったことをうかがわせます。



▲吉槻の石造物分布図